

## ビートたけし 達人対談

VS 気象の達人 村松照男

### 『天気は歴史をも左右している』

(新潮45 二〇〇五年三月)

**たけし** おいら先生の本を読むまで勘違いしていました。飛行機雲というのは、飛行機がサービスで出しているんじゃないかなって思ってたんですけど、航空ショーでやっているのと同じ種類のものだと思ってた。

**村松** 航空ショーで始めたのは、東京オリンピックの頃からですよ(笑)。要するに、水蒸気が雲になるには、核が必要なんです。飛行機のエンジンから微粒子が出たり、あるいは水蒸気が出たりします。それが核になって雲の粒が出来ることで、飛行機雲ができる。普通の水滴は、何らかのキツカケがない場合、つまり核になるものがないと、マイナス三十九度まで凍りません。

**たけし** 雲って流れているように見えて、流れているんじゃないかって、消えてはどんどん作っているんですよ。

**村松** どんどん作っては消えている場合もあるし、流れている場合もあるんです。例えば山の雲なんていうと、裾野からはい上がったところに出て、下がった山裾のところで消えてきます。雨となつて一粒ポツンと落ちてきます。あれは直径二ミリぐらいです。ところが、上空の雲のなかでは水滴は二十ミクロンぐらいです。それが上昇気流で浮いているのが雲です。その雲の粒が牛乳パック一つに百万個ぐらい詰まっただけで、集まってポツリと一粒の雨が降ってきます。

**たけし** 雨の予報で今までに大失敗したことってないですか。

**村松** 私が予報官をやっていた頃は、雨と出たのに晴れてしまって、始末書も書きました。報告書ですが。

**たけし** 始末書、書くんですか(笑)。

**村松** 晴れと出して雨になったり、最高気温も五度以上違ったらダメだとか、いろいろあるんです。何枚も書きました。

**たけし** 降水確率何%と言い出したのはいつ頃からですか？

**村松** 二十年ぐらい前からです。

**たけし** 何%の確率というのは、どういう意味なんですか。

**村松** 一ミリ以上の雨が六時間の間に降るか、降らないか。その確率です。わかりやすく言えば、百回予報をやったとして、三十回雨が降りそうな天気であれば三〇%です。だいたい降水確率五十%を一つの目安として考えていただければと思います。それ以上だったらだいたい雨が降ると。

**たけし** 傘持っていくかどうか迷うことがあるんですよ。

**村松** 三十%がひとつのがボーダーラインですね。十回のうち七回は降られない。でも濡れたくなかったら傘を持っていくなきゃしょうね。あれは、過去の統計のデータの積み重ねと数値予報とで、コンピュータを使って割り出しています。

**たけし** 降水確率の予報になると、昔のように始末書を書くことはなくなるんじゃないですか。

**村松** そうですね。数値で出ているわけですから。一年間、様々な予報を出すわけですが、本当に気象にはいろいろな現象があります。例えば、雷はピカッと光って落雷するでしょう。あれは雷が落ちていると思っている人が多いんです。しかし、実際は落ちるのではなく、雷は上下に行き来をしているんです。

**たけし** そういえば、アメリカ人が撮ったものだと思うけど、雷の光が地面のほうから伸びている写真を見たな。

**村松** そうです。雷というのは、雲の底にためられたマイナスの電荷が何度も地上に手を伸ばして、ついに地上に届いた時に大電流が流れる。地上のプラスの電荷と雷雲のマイナスの電荷がそれぞれ手を伸ばして「手をつなぐ」が実感ですよ。手のつながった一瞬の間に、四、五回は雲と地上を上下しているんです。その大電流がものすごく狭い数センチ幅で流れるので、大気が急に熱せられて膨張が起きて、ゴロゴロと音がします。

**たけし** 頭の上に落ちたら音もへったくれもないけど(笑)。

**村松** 普通は雲底がマイナスで、地上がプラスなのでですけど、北陸の冬の雷は、それが逆。プラスとマイナスが逆になっていることもあります。

**たけし** それは、なぜですか。

**村松** それが不思議なんです。ねえ。

**たけし** ガクッ。

**村松** 雷雲の角度少し傾いているせいではないかと要因はいろいろと言われていますが、原因は完

全にはわかっていません。

**たけし** 先生は気象大学ご出身ですが、そもそもどうして？ 子供の頃からお天気好きだったんですか。名前も「照男」ですしね（笑）。

**村松** お天気好きというわけでも……。中学生の時に、伊勢湾台風は経験しましたね。秒速五十メートルぐらいの風が吹いて、うちの屋根が飛ばされ家の中で傘をさしていました。そういう体験がきっかけといえはきつかけなんですけど。

**たけし** おいらの体験でも、昔は台風の被害にはよくあったように思います。東京の下町は床下浸水がよくあったから。

**村松** 昔は、のべつ水が出てましたよね。

**たけし** 飼っていたアメリカザリガニがいなくなったり（笑）。近所の鯉飼っている家の鯉がみんな逃げちゃって、それを追っかけ回したりもしたな。

**村松** 東京でも台風が来ると、屋根の瓦が飛んだりしていたんじゃないですか。

**たけし** 瓦が空を飛んでいた記憶はないけれど、窓とか飛ばないように、釘たたで抑えてましたね。でも、子供の時は、台風が来ると面白そうで待つてましたって感じだった（笑）。昔は低気圧を表すのにミリバールだったでしょう。台風も中心部は何ミリバールとか言っていた。それが急にヘクトパスカルなんて言われ出しちゃって、確か一気圧というところ……。

**村松** 一〇二三ヘクトパスカルですね。

**たけし** 昔、学校で習ったけど、太平洋で台風が発生すると、一ミリバールにつき、海水が何メートル上がるんですよね。

**村松** そこまでは上がりません（笑）。例えば九百五十ミリバール（ヘクトパスカル）だと、一気圧よりも六十ミリバールぐらい下がるので、逆に六十センチぐらい海面が上がる。気圧に反比例して海面が上がります。ですから、低気圧である台風が来ると、高潮になる。それが南風で吹き寄せてきて、伊勢湾とか南に向いている湾に入ると来ると大きな高潮になります。台風というのは、とても不思議な生き物なんです。例えば台風の目は丸いと思われてますが、四角かと五角形とか六角形のものもある。一番内側が変形することがあるからなんです。千鳥足の台風もあります。

**たけし** 戦争中にアメリカのB<sup>29</sup>なんか、台風の目の中に突然入ってしまて「風がゆつくりして、何にもありません」って。そんな報告するシーンとかが映画でもあるじゃないですか（笑）。よく飛行機

が台風の中に入っているものですよ。

**村松** あれは、だいたい高度三キロぐらいのところから入っていくんです。大きくて、機体が頑丈な飛行機でないと、台風に吹き飛ばされてしまいます。台風観測のために、アメリカでは、戦後になってグアム基地からずっと飛行機を飛ばしていました。一九八七年まで続いていたね。

**たけし** 台風の中って、上昇気流やら何やらでガチャガチャになっているものだと思いますけど。

**村松** やはり台風の目の周りにある壁の中に入ったらすごいらしいんです。それこそ乱気流でガチャガチャの世界で、普通の飛行機だったら乱気流に巻き込まれて落ちてしまいます。軍用機のMC-130、ハーキュリーズという大型輸送機を改装して観測用に使っていたんです。速く飛んでしまうと、目を通り過ぎてしまつて、観測ができないので、ジェット機より、むしろ速度が遅いプロペラ機でないといけないんです。

**たけし** 天気予報で見る台風の低気圧の表示は、どの辺の部分を計測しているんですか。

**村松** 台風の場合、高さが十六キロぐらいありまして、直径が千キロぐらいですから、レコード盤みたいな世界ですね。地上から上空までどのぐらいの低気圧で、どの程度の風が吹いているかは立体的に見ているんです。天気予報で発表している気圧や風速は地上で計ったものです。上のほうへ行くと、風は地上よりも三キロぐらいのところが強いですね。台風のエネルギというのは、海水温が高いところで水蒸気がたくさん出来るのがなんです。それが台風の餌となっているため、赤道あたりで発生することになるんです。

**たけし** 台風がそうだとすると、竜巻はどうして発生するんですか。アメリカでは砂漠のほうに竜巻が出るでしょう。

**村松** 基本的には、上空に非常に冷たい空気があつて、下のほうにカリブ海から暖かい湿った空気が流れ込むと、積乱雲というのができます。竜巻は、それが回転し出すんです。直径二百キロぐらいの入道雲が回転すると思っただければいいのです。

**たけし** 竜巻があると、握りこぶしぐらいの大きなヒョウとかが降ってきたりするでしょう。あれはヒョウが竜巻の中で、上がったたり下がったりしているうちに大きくなるんですよ。

**村松** そのとおりです。ヒョウは割ってみますと、断面はシマ模様になっているんです。ヒョウは積乱

雲の中で上がったり下がったりして、その回数分だけ縞が出来る。水滴をつけてきたり、雪粒をつけてきたりして、白く濁っているところと透明なところとが出来るので、そういう年輪みたいな模様になるんです。

**たけし** それが車なんかにガンと落ちてきたりする(笑)。

**村松** あれが頭に落ちてきたら大変なことですよ。秒速二十メートルぐらいで落ちてくる氷のツブテとなります。一番大きなものは、日本で、三十センチと言われています。しかし、それは落ちた跡の穴を見て言っているのであって、実際にはそんなに大きくないでしょう。記録であつたものでは大きくても十センチぐらいです。

**たけし** 日本でも竜巻はあるんですか。

**村松** もちろんありますよ。しかし、アメリカのほうがやはり規模が大きい。南から非常に湿った暖かい空気が入ってくるからですね。日本で一番大きいのは、房総半島の茂原が竜巻に襲われた時です。竜巻というのはフジタスケールというF1からF5まで指標があつて、F5が最大です。日本の竜巻は最大でもF3で、F4以上はありません。ところが、アメリカではF4が観測され、F5もまれにあるんですね。秒速百メートルぐらいの風が吹きます。平気で車が飛んでいきますよ。

**たけし** 映像で牛が飛んでいるのも見たことがあるな。しかし、入道雲が巨大化すると、どうして回転するんですか。

**村松** それは非常に難しい話で、それがわかれば、竜巻発生の予測ができます。いろいろと言われている、例えば東風と西風がすれ違ふとか、前線の付近で上空のほうの流れが変わつて、それがきっかけになるんじゃないかとか。

**たけし** まだわからない?

**村松** そこら辺が一番鍵になっているのですが、まだ完全に予測ができていないんです。

**たけし** 竜巻がどこへ行くかの予測も出来ないんですか。

**村松** 竜巻は難しいです。言ってみれば、つむじ風と同じですから。家や町を避けてみたり、かと思えば高速道路に沿つてみたり。どこへ行くかわからないというか。たぶん竜巻に意思があるんでしょうけどね。自分でどっち行きたいとか(笑)

**たけし** 台風でも、予想と全然違つて、どうしてここに上陸したかがわからなかったというのはありませんか。

**村松** 最近はあまりありませんね。台風は、あれだけすごい渦なんです。自分では動けないんです。上空の高さ七キロぐらいの風で流されているだけなんです。二〇〇四年は台風が十個上陸しましたね。あれは台風の責任じゃないのです。台風が流されてきたら、たまたまその先に日本列島があつたわけですよ。

**たけし** 台風を恨んじやいけないのか。

**村松** なぜ、去年あれだけ日本列島に来たかといえ、夏は本来、太平洋高気圧というのが日本に張り出してる。それが壁になつて、台風から日本を守ってくれる。二〇〇四年は太平洋高気圧が北東方向にずれてしまった。壁がなくなつたら、風の流れがちやうど日本に来てしまつたんです。普通なら中国に行くはずなのが、全て日本に来てしまいました。台風にとつてみれば、日本列島に上陸すれば、陸地との摩擦があつたりして勢力は衰えますから、できれば上陸したくない(笑)。海上にいれば、もう三日ぐらいは寿命があるのですから。

**たけし** 日本は台風国みたいなイメージがありますよね。

**村松** やつぱり日本は多いほうでしょうけど、台風と同様のものは世界中にありますからね。北太平洋の日付変更線から西側は台風。それより東側と大西洋は全部ハリケーンと言ふんですね。南半球はインド洋がサイクロンになります。

**たけし** アメリカのハリケーンは全部女性の名前をつけるじゃないですか。ジェーン台風とか。

**村松** アメリカ軍の気象学者が自分の妻や彼女の名前をつけたんですね。日本でも、アメリカになつて、ジェーンとか、マリイとか呼んでいました。洞爺丸台風はマリイだった。それからしばらくして、今度は男女平等で女性の名と男性の名を交互につけるようになりました(笑)。

**たけし** 警戒させるために、権三台風とかどうかな。「権三台風が暴れ回つております。注意してください」つて(笑)。

**村松** 二〇〇〇年から、アメリカの名前だけではなく、アジアでも名前をつけましようということになりました。日本は「てんびん」とか星座の名前をつけます。中国は孫悟空や風神といった名をつけます。国によっては動物の名や花の名とか。それぞれの国が順番で名前をつけていて、今はそれを使っています。

**たけし** 何でもまた日本は星座なんだろうね。

**村松** 花子とか太郎だとか名前をつけてしまうと、

大きな被害になった時に、その人に非難がいくのではと心配したようです。

**たけし** 星座ならだれも傷つかない。

**村松** どうもそういう結論で落ち着いたみたいですよ。

**たけし** でも、てんびん台風とか呼びませんよね。

**村松** 普通は台風第何号と言っています。しかし、天気予報をよく見ると号数の後に括弧して名前が全部ついていきます。国際的な共通ニツクネームみたいなものです。

**たけし** 結局、どう呼ばれていても印象に残るのは被害が出たやつですよ。台風何号とか言われても、何だかわからないけど、何とか湾台風とか言われるとピンと来る。

**村松** 戦後だと、有名なのは狩野川台風、第二室戸台風、伊勢湾台風、それから、宮古島台風というのが第一、第二、第三とがありました。でも、台風にこうしたネーミングをすることは最近はないですね。そんなに大きな被害が出ないからでしょう。

**たけし** この日本で、台風の被害がそんなに大きく出なくなってきたのはすごいことだと思うんだけど。

**村松** 地震と同じで、対策が練られてきているからでしょうね。注意報警報など、防災対策が非常によくようになってきていて、皆さん、警報を出せば逃げていただける。例えば昔は、たまに海上で逃げ遅れて、台風はかなり中心まで接近して観測してくれる船があったんです。最近はずっと逃げてしまうので、そうした船がいなくなっちゃった（笑）。台風の防災対策が練られるようになった一番のきっかけは、一九五九年の伊勢湾台風ですね。一九六一年に第二室戸台風が来ましたが、そのときから被害は本当に少なくなりました。伊勢湾台風は五千人の方々が亡くなりましたが、七十年代以後の被害は二桁台になりましたから。

**たけし** それだけの死者が台風で出るというのは、昔の日本の建物も相当情けなかったということだね。

**村松** それもあるのですが、台風の場合、家が倒壊するより、高潮で亡くなる方が多いですね。死者が少なくなったのは、警報が早く出るようになり、防災と護岸がよくなったおかげです。

**たけし** この間のスマトラ沖地震では、たくさん津波で亡くなりましたが、高潮と津波の違いって、何なんですか。

**村松** 津波というのは、地殻変動によって起こるもので、地震の世界なんです。波の周期が非常に長

く、海全体が山のごとく動いて来るわけですね。高潮は十秒ぐらいの間隔で波が来るわけです。高潮は水面が上がるっていつても、せいぜい一メートルぐらいです。伊勢湾台風の時はいくつ・五メートルも海面が上がって、それが堤防を越えたため、被害が生じたのですが、あれは全く別格。一方、津波は非常に大きなもので、三陸の海岸に行くと、町の中の数十メートルぐらいのところに看板があつて、そこに白い線が引いてあるんです。明治の三陸大津波の時はそれぐらいの津波で、昭和の大津波は二十数メートルでした。

**たけし** 風呂場で、風呂のお湯全体がドバツて上がってくるのが津波で、お湯がちよつと波を立てているのが高潮ってわけか。でも、先生は気象だけではなく、地震にも詳しいんですね。地震のほうはご興味ですか（笑）。

**村松** いや、もちろん仕事ですよ（笑）。例えば名古屋地方気象台長をやっていた時には、東海地震のことで、講演に行くことも多かったのです。札幌管区気象台にいた時には、有珠山噴火がちょうど起こったため、懸命に火山の勉強をしましたね。

**たけし** そう言えば、地震の時に、“地震雲”が出ると言いますが、根拠はあるんですか。

**村松** よくそう言われるんですが、本当に因果関係があるのかどうかわかりません。それらしき雲が出ていても、地震が起らない時もある。だから、起こった後で、「あの時、あの雲が前兆だった……」と言われることが多いんです。

**たけし** 全部後からの解釈なんですね。

**村松** 地震予知では、東海地震は観測網が非常によく出来ていて、今どのステージにきているかというのはかなりわかっています。地震は、断層がズレていって、それが最後にスリップして断層がはねることによって起きるわけです。ずるずるずるつとズレている部分とその周辺に地震が多くなるわけですが、その動きが静かになったら危ないとか。

**たけし** でも、実際、予知ができたとしても、これから起こりますとかっていつて発表はしづらいんじゃないですか。パニックを起こすだけだから。

**村松** 東海地震だけは予知をやることになっているんです。警戒宣言を出すというふうに法律で決められているんですよ。

**たけし** 災害もマスコミの関心は高いけれど、「異常気象」って言葉もマスコミは好きじゃないですか。地球は温暖化しているとか言うんだけど、本当のところはどうなんですか。

**村松** その判断は難しいんです。「地球温暖化」というのは百年の単位の変化の話です。もうちょっと経ってみないと、はっきり温暖化になっているかどうかはわかりません。今、温暖化の傾向があっても収まってしまうかもしれない。

**たけし** 北極と南極の水自体はどうなんですか。やっぱり溶け出しているんですか。

**村松** 北極の水が溶けていますね。人工衛星からの観測ですと、十年間で永久氷が数パーセントも面積が少なくなっています。これは普通に考えてみれば、大変なことです。いずれ北極の水がなくなってしまう。日本の付近でもシベリアの高気圧は、最近あまり元気がない。なぜならば、やっぱりシベリアが暖かくなっているからなんです。

**たけし** 海の側のお台場なんかに住んでたら危ない(笑)。

**村松** 温暖化すると、海面が高くなります。これから先、冬將軍という言葉も死語になるかもしれないですね。冬將軍の語源を知っていますか。

**たけし** そう言われれば、知らない。何だろう。

**村松** 冬將軍って漢字で書くけれど、中国語にはありません。辞書を引くと、ナポレオンがモスクワ遠征に行ったとき、寒さに負けたことに由来すると調べてみると、ロシア語にも冬將軍という言葉はないんです。それで、ナポレオンが本当に冬將軍に負けたかどうか調べてみたんですが、ナポレオンは六月にロシアに攻め込んだんですけれども、すでに夏の段階でぼろぼろに負けているんです。

**たけし** 全然冬じゃない(笑)。

**村松** 九月にモスクワに入城していますが、その時に、すでに兵力が五十万から三分の一ぐらいになっています。十月十三日に初雪が降ったので「退却!」と言って、帰ってきました。十二月にフランスに戻ってきた時は兵力は百分の一ぐらいに減っていました。しかし、十一月までは記録ではそんなに寒くはないんです。戦力的な敗退だったのです。

**たけし** 退却したのは、要するに、補給路が続かなくなっちゃったからなんですよね。

**村松** ナポレオンがモスクワ遠征に行った年の冬は、ものすごく寒い年だったのは確かなんです。例えば日本では隅田川が凍ったとか、淀川が凍ったとかいう記録があります。諏訪湖に「御神渡り」という現象があって、冬になると凍った湖面が割れて、割れた部分から今度は水が盛り上がってくる。この御神渡りは五百年にわたって記録されていて、それを見ると、その年は二百年に一度あるかないかとい

うぐらいものすごく寒い冬だったのは間違いないのだけど、それはナポレオンが完全に退却した後のことなんですよ。

**たけし** それでは、語源はいったい何だったんですか？

**村松** だから、冬將軍って、いったい何なんだろうなど……。

**たけし** ガクツ。

**村松** 一つの説は、イギリス人の記者が、ナポレオン將軍がロシアの寒さに負けたと書いたと。常勝の將軍が自然に負けたと書いたもので、そこから来たのではないかというんです。でも、「冬將軍」とは書いてないんです。

**たけし** 冬と將軍が結びつくのは、いかにも日本人が考えそうなことだと思いませんか。ナポレオンの頃、江戸時代の日本は、一年を通して気温的にはどうなんですか。

**村松** 江戸時代後半は非常に寒かったんです。それから見れば、この百年で日本の平均気温は一度上がっています。だから、確かに百年単位で見れば、非常に暖かくなっています。世界は百年で〇・七度ぐらいい。地球全体で三度上がれば、三百万年ぐらい前より気温が高くなると言われています。人類が誕生した頃よりも暖かくなる。一度上がるといえるのは大変なことなんです。先ほど温暖化についてはつきりしたことは言えないと言いましたが、二十年前ぐらいいから急に気温が上がってきています。温暖化をしているのかなとも思います。

**たけし** 一九〇〇年当時で地球上の人口は十六億人くらいでしょう。それが百年ちよつとで六十億人。そういう爆発的に増えた人間の経済活動が温暖化に影響してませんか。

**村松** 人間の数が多くなるといえるのは、地球温暖化のかんりの要因でしょう。やっぱり経済活動と同時に、エネルギーを使って二酸化炭素を大量に出すので、それが温室効果を促しますから。動物はだいたい身分相応に、小さいのは小さいなりに、大きいのは大きいなりのエネルギーを使いますが、人間だけは身分相応な大きさ六十三倍のエネルギーを使っています。

**たけし** 異常気象といえば、すぐにその原因にエルニーニョ現象が上げられるじゃないですか。あれはいつ頃から言われているんですか。

**村松** 現象そのものは昔からずっとあるんです。それが最近になって異常気象との関係で騒ぎ始めたということなのでしょう。エルニーニョというの

はスペイン語で「男の子」、あるいは「神の子」という意味です。あれは、十二月のクリスマスの頃に南米のペルー沖で海水温が広範囲にかけて上がるという現象なんです。そうすると、魚が獲れなくなったりするわけです。それで「神の子が来た」とか言っ

て、恐れていたんです。  
**たけし** 海が冷えてないとプランクトンなどが発生しない。それで小魚が集まらないので、大きな魚も獲れなくなる。

**村松** それがエルニーニョです。これと逆なのが、ラニーニャといって、女の子。ペルー沖に冷たい海水がわき上がり、インドネシア近海の海が暖くなる現象です。いずれにしても、エルニーニョになると、海水温が高いので、水蒸気がいっぱい出て、雲ができる。雲ができると、それがどこかで降りてくるわけですが、それによって、地球全体の大気の流れが変わって、異常気象が起こるんです。エルニーニョが起こると、ペルーの付近は雨がたくさん降ることになりますね。あそこは三百年から四百年間、降雨の記録がとってある。一方で、エルニーニョになると日本は暖冬になりますが、暖冬になると諏訪湖の御神渡りの時期が遅くなる。諏訪湖の御神渡りは五百年の記録がありますから、ペルーの記録と比較して、それが一致したという英語の論文を書いた研究者もいます。

**たけし** 木の年輪で昔の気候を調べていくのもありますよね。

**村松** 気候変動によって、つまり暖かい時と寒い時とで、樹木の成長度合が違うので、どういう気候だったかわかるわけで貴重な記録です。日本では、昔から伝わる代々の史書がある家もあるので、そうした記録を調べて、例えば平安時代でしたら桜がいつ咲いたか、といった研究をしている大学の先生もいます。

**たけし** 忠臣蔵の討ち入りは本当に雪だったのかとか、そういうのもよく話題になりますけど。

**村松** 忠臣蔵の討ち入りは十二月。だから、普通、十二月であんなには雪が降らないだろうなと思って調べると、今の暦に直すと一月の三十日です。だから、降っていてもおかしくはないわけです。

**たけし** 歴史的なことといえば、蒙古襲来ときの神風は、あれは台風なんですか。

**村松** 蒙古襲来は二回来ましたよね、文永の役と弘安の役。研究者によると、文永のほうは台風ではないだろうと言われています。あれは普通の低気圧。蒙古軍のほうも予定どおりの撤退だったようです。

しかし、弘安の役のほうは完全に台風にやられて、蒙古軍の船は沈んだらしい。他にも、神風で言えば、明治維新の時も神風が吹いたんです。幕府の海軍・榎本艦隊は当時としてはものすごく強い艦隊だった。それが江戸から北国に向かったわけですが、東京湾を出た途端に台風に遭って、主力艦がみんな故障してしまった。だから、もし榎本艦隊が台風に遭わなければ明治政府は困ったはずですよ。

**たけし** 天気が歴史を左右したわけですね。

**村松** 気象と歴史の話も面白いですが、政治のニュースも気象を知っていると少し違った角度から眺められるんです。このところ、北朝鮮のニュースが話題になりますが、北朝鮮では「聖山」になっていますが、金正日の生家がある白頭山つてありますね。あれが北陸の豪雪に関係しているんですよ。

**たけし** けしからんな（笑）。

**村松** この白頭山の山脈が寒気の流れを変えて、日本海で強い雪雲の帯を作るんです。それが北陸にぶつかって、大雪を降らす。だから、あの白頭山を全部削ると北陸の豪雪の量も変わってくるかもしれない。豪雪対策のもう一つの方法は、朝鮮海峡を大きなダムで止める。南から来る暖流を止めてしまえば、気温も変わってきますから、北陸の豪雪もなくなるはずですよ。

**たけし** ダムつたいに難民が押し寄せてくるかもしれないけど、神風が吹くから上陸できないって（笑）。昔は天気予報がなかったから、漁師さんとか、山のマタギの人とか、空を見て、「ああ、明日は雨だ」とか言うじゃないですか。あれは結構当たるもんなんですよ。

**村松** 天気俚諺といって、「こうなると雨だ」ということわざは各地にあります。天気の兆しを見つけて、それで天気を予測することを「日和見」と言っ

たんです。例えば夕焼けの次の日は晴れだとか、山が雲の笠をかぶれば、雨になりやすいとか。山に笠がかぶれば、七割ぐらいいは雨になります。我々は今、その日和見をスーパーコンピューターで計算しているわけです。

**たけし** コンピューターが発達して気象が正確に読めるようになれば、人間が考えつくのは穀物の先物買いか。すでに気象庁の予報官の中でも先物で大儲けした人がいたりして笑。

**村松** それはインサイダー取引になるからやってはいけません。例えば長期予報を担当している人は、長期予報を発表する時刻が決まっています、それまでは絶対に外へ漏らしません。天候がどうなる

か一つで、例えば、北海道の小豆相場に大きく影響するわけですから。

たけし 近畿日本ツーリストとか、観光会社から「すいません、今年のGWの長期予報、ハワイの天気はいいことにしてください。でないとお客が来ないんで」とか、付け届けもらったりすることはないですか（笑）。

村松 そんなことはありませんよ。

たけし 天気のことでは、うちの助監督といつも大げんか。「晴れるって言ったじゃないか、ばかやろう！ 雨降ってんじゃねえか！ どうしてくれるんだ」って（笑）。助監督はスケジュール組む都合で、その地域の気象情報会社から予報を貰っているんだけど、はずれることもあるわけ。『日没ねらい』っていうのもあって、何時何分日没だというから準備していたら、「おいおい、今、沈み出しているじゃねえか」って。そうしたら、「すいません、時間、間違えました！」（笑）。

村松 それは予報官の責任じゃない（笑）。でも、夕焼けや朝焼けをきれいに撮ろうとしたら、難しいでしょうね。

たけし あっという間に陽が昇ったり落ちたりするからね。

村松 確かに、あっという間ですね。たけしさんはグリーンフラッシュというのは、見たことはありますか。夕焼け撮っていると、たまに撮れるはずなんです。

たけし いいえ、ありませんね。

村松 夕焼けというのは赤いですよね。大気中の光は七色に分けられるのですが紫とか藍とか、そういうものは途中で散乱して飛んでしまうから見えないんです。普段は波長の短い青が人間の目に入りやすいので、空は青く見えます。しかし、本当は緑も入ってるんですけど、なかなか見えない。ところが、空気が澄んでたり、ちよつとした加減で、夕ぐれに太陽が沈む瞬間に橙色の太陽の頭のところに緑色の輪が出来ます。それがグリーンフラッシュです。○・何秒という閃光です。それを見るのはとても稀なこととで、例えば、日本海側とか、カリフォルニアの西海岸だとかでは見られることがあるんです。

たけし 四葉のクローバーみたいなもんだね。

村松 私が若い頃に南極観測隊に参加した時に、南極で一回だけ見ました。すごく感動しましたよ。

たけし おいらもいつか見てみたいけど、とりあえずはロケの現場で天気予報がはずれないでもりたいな。先生もおいらのロケ現場に、天気を予報し

に来てもらえませんか（笑）。

## 取材報告

気象衛星センター所長

新潮者の総合月刊誌 「新潮 45」誌上の

「達人対談」というタイトルで、タレント北野武氏（通称ビートタケシ）との対談を行った。

日時… 平成17年1月27日14時—16時

場所… 赤坂プリンスホテル

対談相手 … 北野タケシ

新潮45編集長、中瀬ゆかり氏

新潮社 常務 石井 昂氏

オフィス北野社長 森昌行氏

まとめ 新潮45副編集長 吉澤氏

掲載予定… 平成17年2月号

対談内容… 気象、地球環境、地震など幅ひろい

話題で対談

出前講座扱いで外勤扱いとし謝金は無しとした。

なお、衛星の打ち上げ日程は話題にのぼったがそれ以上の話題とはなかった。

2月はじめまでに、素原稿が作成される。

内容の確認を行う。

以上

平成17年1月31日



